

して、異常と思われるものを一応不自然即人為の反映とかなり短絡的に結論づけた。なお実測図は欠くが写真等から判定しうるものも一部活用した。

(e) ピット類の構築位置について 各時期を通じて、ピット類には重複の事実が多い。これはその構築位置決定に、何らかの規制が存在したことの反映とも考えられる。貯蔵施設域的なものの設定と、その内部における構築位置の決定に何らかの規則性が存在したとすると、この種のものは二重の規制下にあったこととなる。

(f) 壁の補強的措置について 検出したピットのうちの若干例に、隣接するピットとの重複部分に礫・粘土等が存在した。これには調査者によって、重複・接触により脆弱化した部分の補強的措置と見做されており、筆者らもそれは妥当と考えた。

(g) 遺物の残存状況について 遺構と本来的な対応関係にあるという遺物は少ない。若干例の土器類（横転位中心）が該当する程度であり、一般的に遺物の残存は少ない。これはこの種遺構の一特徴と見做しうる点であり、この種遺構は少なくとも廃棄時には空の状況であったことを思わせる。これはこの種遺構の機能想定上、消極的ながら一資料を提供するものであろう。

なお本遺跡の D D 15 f. p. の堆土下位より出土した植物種子については、卷末にその鑑定結果を掲げた。その出土状況その他の詳細は、写真以外の資料を欠く故に不明である。

註1 氷瀬福男 秋田県内におけるフラスコ状ピットについて 秋田地方史論集 半田教授退官記念会編 昭和56年

註2 筆者（石川・相原）らが村教委の依頼により調査したものである。昭和53年

(d) フラスコ状ピット類他の機能・用途について

この種遺構の機能・用途について簡単にふれておく。それにあたりこの種ピットについての学史を回顧すると、まず岩手県におけるこの種遺構の機能・用途についての最初の論考は草間俊一氏によるものである。その要旨は以下のとおりである。「(前略)この種の竪穴は大きさが小さいのに、深さが大である上に、底部に向って末広がりに広がったフラスコ状を呈しているものが多いのが特色である。結論を先にいえばこれも住居として掘られ、住まわれたものであるということで、その大きさや深さなどから貯蔵穴と考えたり、動物を捕獲する落し穴または墓塚と考えるのは当らない。ただこの竪穴が埋まって行く過程において、墓塚として用いられた場合があると考える。この種の竪穴が住居跡であるとする理由は（中略）この深い竪穴の床面に厚さ5センチ内外の炭化物を含む層が一面に敷きつめられたように存在することで、これらの遺物の存在はそこでの生活を無視しては考えられない。その生活とは「ほどあくを敷いて寝

る、生活である。ほどあくを敷いて寝る生活、とは岩手県などでごく最近まで冬山で狩りをしたり、炭焼きなどで寝る場合、地面で簡単な焚火をして地面を温めてから、その焚火を踏み消してその上に熊の皮などの獸皮を敷いて寝る生活のことで、そうすると地面のぬくもりが残っていて温く寝られるとのことである。そして冬の寒さをしのぎ、また翌年使用すると云うように数年使用したものと考える。従ってこのような堅穴は冬だけの「ねぐら」として使用したものであった。(中略) それがある程度埋まって浅くなつた時に、普通の堅穴住居のように日常使用する場合もあった。(中略) これを貯蔵穴乃至動物捕獲の落し穴などと考える見解は、岩手県で筆者の担当して調査した限り、その埋没の状態からして考えられない。ただこのような小堅穴を埋没を繰返しながら使用した過程で、また穴が廃棄され残存している状態で、墓塚として使用されたこともあると考へられる例もある(後略)。」以上のように氏の推定の骨子は、冬期間のねぐら説ともいるべきものであった。なおこの論考において氏は、この種遺構の①形態規定、②存在状態、③類例、④存続期間などについても言及しているが、極めて適切な指摘が多い。とくに②の存在状態についての指摘は重要であった(後述)。

草間氏の論考以後には、この種遺構を考察の主題にすえた論考は発表されておらず、若干の報文中でふれられている程度であった(註2)。

昭和40年代以降に激増する大規模事前調査はこの種遺構の類例の多量の蓄積を結果したが、岩手県においてはそれらの多くに「貯蔵穴」的な機能想定を行なう例がほとんどであった。しかしながらそれらは厳密な検討をへたものとは必ずしもいえないもの多かった。

全国的視野のもとにこの種遺構を検討した論考は堀越正行氏のものであろう。現在未完のこの論文はこの種遺構の学説史的回顧・検討を主とし、その史的意義にまで及んでいる。ここでは氏の整理に従がい、この種遺構の機能・用途論を見ておく。氏によると以下のような用途の各説が存在した。即ち①墓塚説、②採掘塚説、③ねぐら説、④捨て穴説、⑤犬小屋説、⑥落し穴説、⑦倉庫説、⑧貯蔵穴説等である。①についてはこの種遺構には二次的な転用が見られる程度であり、本来的なものとはいえないとした。また本来的な墓塚はこの種遺構(即ち氏の「小堅穴」)とは形状等が異なるとも指摘した。②についてはこの種遺構の整形性・小規模性・狭口形態をもって妥当ではないとした。③は先にふれた草間氏の説であるが、「(前略) 小堅穴と焚火が有機的関係をもっているかの再検討が必要であろう(後略)」とし、この説を他地域の小堅穴へ汎論することをひかえた。④については小堅穴廃棄後の二次的な活用の一面の指摘にすぎないとしりぞけた。⑤については、犬骨の検出例が無い点・深い円筒状小堅穴や他の小堅穴にその可能性を認めがたい点をとり、しりぞけた。⑥については、落し穴と見做さるべき他の土壙とは形状等が異なる故をもって否とした。⑦については、貯蔵庫と想定されているものが、いずれも円筒状小堅穴なる点や、何を貯蔵していたのかという点まで言及していないなどの不備があることから評価を柵上げしている。⑧については、各地における遺物残存例や土器の存在例などを総合して、「(前略) 木の実を主とした植物質食料を貯蔵した(と考えられる)

小豎穴を「貯蔵穴」とし、貯蔵庫の一使用法と理解しておきたい（後略）。」とし、貯蔵穴説が現段階においてはもっとも合理的な解釈とした。

遺物の出土状況その他の検討を主とする考古学的方法に加え、一種の実験的方法をも加味して、この種遺構の機能想定を試みたものに氷瀬福男氏の論考がある。この論考も別にふれてあるとおり論点が多岐にわたっているが、機能に関するものとしては、ピット内の年間の温湿度の測定結果からする推定が記されている。「（前略） フラスコ状ピットの温湿度は、夏期で摂氏15度・90%以上、冬期で口縁部に蓋をすると摂氏2度・90%以上と一定である。（中略）この温湿度は、野菜を越冬させるために必要な温湿度である摂氏0～3度、90%以上に近い数種を示している。（中略） 梨ノ木塚遺跡のフラスコ状ピットから、底面直上で栗が多量に検出された例は、このピットの機能を示唆してくれるものではないだろうか。栗のほか、ドングリ・クルミなどの貯蔵も考えられる。山館上ノ山・柏子所・鳴滝・萱刈沢・館下I・大畠台遺跡の発掘調査では、ドングリ・クルミが検出されている。（後略）」と、貯蔵穴説にたっている。

以上のようにこの種遺構についての機能想定のうち、現在もっとも有力なそれは「貯蔵穴説」といえよう。なお西日本におけるこの種遺構（袋状ピット）は早くから「貯蔵穴」視されてきたところであった（註5）。

本遺跡を含む岩手県内のこの種遺構の特徴も大略如上の各説の指摘に合致するものが多く、やはり貯蔵穴類似のものと見做して大過なかろう。少数ながらも木の実類の実物の出土例も蓄積されつつある。たとえば盛岡市仁反田遺跡においては多量の炭化クルミが出土しているし、（註6） 雪石町塩ヶ森Iも同様である。また安代町赤坂田I遺跡においてはトチ出土が知られている。（註7） 今後さらに良好な遺構が検出されるのであろう。ただし別にふれたように、この種遺構に遺物残存例が少ない点は検討されるべき課題である。タイプEとした浅いもの、とりわけ晩期のそれには、貯蔵穴との機能想定は必ずしも必要でない。広義の信仰関連・儀式関連のものである可能性があろう。したがって晩期のEタイプを除くその他のものを、以下には「貯蔵穴様ピット」などと汎称することとする。その場合、諸先学の指摘したように、それらが二次的に墓塚などに転用された可能性も当然記憶されるべきである。二戸市大渕遺跡の類例をひくまでもなく、その事実は厳然として存在するのであるから。本遺跡における一対の耳栓の出土例（E H65 f. p.2）は当初墓塚の存在を思わせるに十分な資料と思われた。しかしその出土状況（相互にレベル差が存在する）や、本遺跡における遺構からの遺物出土状況（その多くが投棄され、遺物の種別による投棄のされ方の異同も看取できない）などの検討の結果は、墓塚説に否定的とならざるを得なかった。

註1 草間俊一 日本原始時代生活についての一考察—フラスコ状豎穴に関して—

森嘉兵衛教授退官記念論文集「社会経済史の諸問題」 法政大学出版局 所収

註2 草間俊一他 岩手県稗貫郡天神カ丘遺跡 大迫町教育委員会 昭和49年

註3 掘越正行 小豎穴考(1) 史館 第5号 昭和50年5月

タ	タ	(2)	タ	第6号	1976年	タ
タ	タ	(3)	タ			
タ	タ	(4)	タ	第9号	1977年	

註4 水瀬福男 秋田県内におけるフラスコ状ピットについて

「秋田地方史論集」半田教授退官記念編 昭和56年2月

註5 南方前池遺跡調査団 岡山県山陽町南方前池遺跡—縄文式末期の貯蔵庫発見—私たちの考古学7 考古学研究会 1956年

註6 財団法人岩手県埋蔵文化センター四井謙吉氏・本沢慎介氏の教示による。本沢氏によると2基の浅目のフラスコ状ピットからの出土のことである。

註7 前記の本沢氏の教示による。炭化したクルミが木の葉とともに出土している由である。

註8 赤坂田I遺跡 岩手県埋文センター文化財調査報告書第15集、岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(昭和55年度分)(財)岩手県埋蔵文化財センター 昭和56年 所収

註9 渡辺誠氏は縄文時代前期から中期にかけて発達した貯蔵穴に対し、堅果類の短期間貯蔵(一冬分のための生貯蔵や、クリ類に甘味を増すために翌春まで埋めておく措置)や、地下茎や球根類の貯蔵用の機能を想定している。このようなものであれば、遺物遺存例が少なくなりかつ、それが所謂一回使いすぐ的な扱いをうけたとすれば、その数が、極めて多くなることとなり、検出状況と合致する。検討に値する見解であろう。

(e) 岩手県における貯蔵穴様ピット類のあり方について

先にその機能を「貯蔵穴」類似のものと推定したピット類のあり方の諸相について若干の整理を試みる。再述になるが貯蔵穴様ピット類としてまとめたものは、本遺跡における分類のA～Dタイプのものすべてである。Eタイプとしたものにはその機能を想定していない。

(a) 貯蔵穴様ピット類の変遷 貯蔵穴と思われる各ピット類は縄文時代の各期に複数タイプが併存するのが常態であるが、各期には主体的形態が存在し、結果的に時期的変遷を示すことになる。その概要を示す。まず貯蔵穴様ピット類の存続期間については、現状では早期に属する確実例は知られておらず、前期初頭が初現期らしく、それはフラスコ状ピットであるらしい(註2) (二戸市上里遺跡)。このことは先にふれた草間俊一・掘越正行両氏の、岩手県・東日本のフラスコ状ピットの初現期についての「前期末」という指摘に修正をせまるものである。初現期云々関連の問題は、類例の追加により変更されるのが常である。フラスコ状ピットはこれ以降晩期まで存続するが、前期末から規模・構築数がともに拡大・増加しはじめ、中期初頭には激増し、その傾向は中期中葉～後葉頃まで続く。江釣子村新平遺跡・本遺跡、大迫町天神ヶ丘遺跡、盛岡市仁反田遺跡は中期初頭頃までの好例であろうし、紫波町西田遺跡は中～後葉のそれであろう。袋状あるいはビーカー型などといわれるものも混在するが、圧倒的多数を占めるのはフラスコ状のものであり、その強い整形性の検討も必要とされるであろう(註3)。

中葉後葉以降晩期にかけての貯蔵穴様ピット類には変化が見られる。それはフラスコ状ピッ